

時間厳守で厳しく、楽しく



社会学部助教 森 田 雅 也
もり た ま さ や

「欠席・遅刻は厳禁。やむを得ない場合は必ず事前に連絡する」。これは社会に出れば当然守るべき常識ではあるが、残念ながら大学の授業に関しては守られていないのが現実である。だからこそ、私はゼミの募集要

項にこの点を明記し、ゼミ募集のオリエンテーションでも今一度強調することになっている。現4回生、3回生のゼミ生はこれを了承した上で私のゼミを選択してくれているので、幸い、彼(彼女)らはいまだ無断で遅刻・欠席をしたことがない。授

業開始を告げるベルが鳴る時刻には、基本的に全員が教室に着している。どうしてなのかはわからないが、私の経験上、時間厳守で始まるゼミは、その内容も緊張感ある充実したものであるように思う。

今、5月半ばは、4回生にとつては就職活動に大忙しの時期である。「4回生の前期も皆出席する意欲のある人を求む」とも募集要項に書いておいた。さすがに4回生前期の出席率は鈍ってはいるものの、ゼミ生の意見を参考に5時限目にゼミの時

間を設定したおかげか、少なくとも14人中10人はいつも顔を見せている。欠席者からの連絡が事前に届いていることは言うまでもない。ゼミ生には申し訳ないが、これは期待以上の結果である。私は偽りなく、こうしたゼミ生をもてたことを嬉しく思うと同時にそれを誇りに感じている。

このように書いてくると、「何を厳しいことを言ってるんだ」「就職とゼミとどちらが大切なんだ」といった声が聞こえてきそうである。確かに、私が求めていることは今の学生にとって厳しい要求かもしれない。しかし、私は本来ゼミとはそうした厳しさを持ったものであるべきだと思っている。学生が自分の意見を人前で述べる機会、それを受けて学生同士で行う議

論、教員から「君はそれについてどう考える」と直接問いかけられる緊張感、自分が研究したことをレポートや卒業論文にまとめる作業。そうした貴重な経験はゼミでしかできない。そしてそれを実りあるものにするためには、やはり適度の厳しさ―それは私のゼミでは時間に対する厳しさになる―が必要である。厳しさと楽しさは両立するものであるし、適当に終えた仕事には満足感に伴わないものである。

もちろん、こうした口うるさいスタイルは学生諸君には受けが悪いことは十分承知している。現に、「希望者ゼロのため不開講」という憂き目にあったこともある。ゼミ生が1人だった時には、関大一贅沢な授業と揶揄されたこともある。私の専

門とする経営学の分野では、環境に適応することが企業の存続条件としてきわめて重要であることが主張される。よく聞くとこの「企業30年説」の根拠もここにある。環境に適応できなかった企業は滅ぶ運命にあるのである。これにならえば、ゼミ運営のスタイルも、現代学生気質に適応したものへと柔軟に変化させていくことが、ゼミ生獲得ひいてはゼミ存続のために必要なのだろう。これを怠ると、30年後に、いや昨今の変化激しい世においては10年もすると、私のゼミは存亡の危機に瀕するのかもしれない。

しかし、同じく経営学は、組織が変化しつつも存続していくためには、核となる変わらぬ何かの必要性も説くのである。本学で言えば、さしずめ「学の実

化」というところであろうか。私としては、一方で環境適応の妙手を探りながらも、変わらぬ何かの有効性をひたすら願うばかりである。自身のゼミの存亡を賭けた長期間に互る実証研究である。

果たして、こういったことを了解して私のゼミに集ってくれる学生がこれから先どれほどいるのか皆目見当がつかない。しかし、私が教員として教育に熱意を持ち続ける限り、この点だけはどうしても譲れそうにない。来年度のゼミ募集要項でも同じ一節を繰り返すことになるであろう。

さて、2時35分になった。三回生のゼミに急がねば。言い出しつpeg遅刻しては洒落にならない。